話しことばの中の格助詞

―― その使用と不使用をめぐって ――

遠藤織枝

－はじめに－

話しことばでは助詞が抜ける、あるいは省略される、と一般に言われる。「抜ける」「省略される」のことばで表されるのは、本来あるべきところに助詞がなかったり、略されたりしているということであるが、話しことばの側からみると、助詞をそこに用いないのが本来の用法ということであるかもしれない。あるいは、話しことばでも改まった場面では使うが、くだけた場面では使わないということもありうる。また、語の共起関係によって、また慣用的な表現として助詞の使用、不使用が左右されるかもしれない。

中島（1987）の「ゼロの格助詞」、藤原（1991）の「ゼロ助詞」、楠本（1992）の「ゼロ格」など、助詞の不使用に着目して、その意味を探る研究が盛んに行われるようになっている。しかし、それらは理論面が中心で、実際面での裏づけが十分になされてはいない。小論では、具体的に実際の談話の中での助詞の使用、不使用の実情から、不使用の意味を考えてみることにしたい。

ここで扱う助詞は格助詞「が」「を」「に」「へ」「と」「から」「より」だが、「が」との関連で「は」にも少し触れる。

ここでは省略とか脱落の語は用いず、使用と不使用の語で進め、不使用の場合その位置を示すために「φ」の記号を用いる。また、話者についてはS家のK、C、M、N家のY、H、N、U、Aのように頭文字で示す。

1. 「を」

談話の文字化資料で「を」の使用、不使用をみると、

(1) あたしは1週間で結婚φして、1週間で話があって、1週間で結婚をしちゃったんですよ、もう。（H）

(2) これφ食べなさい、子供たちだったらば早くごはんをたべなさいよ、とかいいますけど（C）

(3)　じゃ見回りφやってくれなんて、今度は7、80人見回りをまわって歩いて（Y）

のように、「を」の有無がはっきりしている。しかし、実際の音声ではこれほど明確な区別がつけられないものが多い。φのところにもつなぎの音が残り、それが前の音が長音化しただけなのか、「を」の母音「O」が融合しているか、はっきり聞き分けられない場合がある。「を」ととらえたものでも、他の語音と截然と区別できて独立の音と認めうるものばかりではない。「を」とφとは音の面で連続していることが多いのである。

しかし、それであっても、「O」の音が独立してききとりうるものと、全くききとれないものとがあり、どちらかにより近いものとして区別したもので、使用を不使用と分けてみることは可能であると考えて論を進めていく。

(1) (2) (3)は同一話者が同じ内容のことを一方で「を」を使用し、他方で使用せずに表現している例である。ほかに同一内容を別の話者が表現する際の使用、不使用もある。

まず(1)のサ変動詞に1語化したものと、1語化以前の「名詞＋を＋する」（以下「を・する」形とする）について調べてみる。

1－1　サ変動詞と「名詞＋を＋する」

同じ名詞で、サ変動詞化したものと、「を・する」形の使われ方は以下のとおりである。（　）内は話者と使用回数。

結婚する	11（うちH4、U4、Y、M、C各1）
結婚をする	1（H）
話しする	8（C6、K2）
話しをする	1（U）
返事する	2（H、Y）
返事をする	1（Y）
言い方する	2（N2）
言い方をする	1（N）

{仕事する　　1（H）
　仕事をする　　1（H）

「話しする」は次にみるとおりどの辞書にもサ変形は認められてないなが、その他ではサ変形「をする」形でみるとすべてサ変形の方が多く使われている。なお「名詞＋が＋する」からサ変動詞化したものとして

{感じする　　3（C 2、K 1）
　感じがする　　6（K、H各2、C、U各1）

もあった。

その他のサ変動詞あるいはサ変動詞化して使われていたものについて、1語とみなせるか、否かを考えるために2種の中型国語辞典と8種の小型国語辞典計10種の国語辞典（注1）のそれらの語の扱い方を調べた（表1）。サ変形があるが「を・する」形の方を使っている例もあるので、「を・する」形の使用例の場合は語末に（を）として示した。また、語末の数字は使用されていた例数である。

採集例中、意識する(2)、印刷する、区別する(2)、苦労する(2)、結婚する(10)、検査する、集中する、商売する、想像する、疎開する、卒業する(4)、注意する(6)、注文する、販売する、勉強する(3)、返事する(2)、奉公する(2)の、17語40例については、漢語名詞に「する」がついた典型的なサ変動詞で、10種の辞書すべてが、サ変動詞形を認めているから、ここでは問題にせず、サ変化を認めるかどうかゆれているものについて表にした。

（○：サ変化を認めているもの
×：名詞は立項しているがサ変形を認めていないもの
－：名詞を立項していないもの
＊：「バイト」が空見出しで「アルバイト」へ導いていて、「アルバイト」にサ変形を認めているもの
古：古語としてサ変形を認めているもの）

表Ⅰ　サ変動詞の辞書の認め方

国語辞典 ＼ 採集例	①大辞林	②日本語大辞典	③岩波国語辞典四版	④現代国語例解辞典二版	⑤三省堂国語辞典四版	⑥三省堂現代国語辞典二版	⑦集英社国語辞典	⑧新潮現代国語辞典	⑨新明解国語辞典四版	⑩例解新国語辞典三版
商い　する（を）	×	×	×	○	○	○	×	×	×	○
荒彫り　する	○	×	−	−	−	−	−	−	−	−
おしゃべり　する	○	○	×	×	○	○	×	×	×	○
おめもじ　する (3)	○	○	×	×	○	○	×	○	×	−
外交　する	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×
かっこ（う）　する (3)	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
組み合わせ　する	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
仕事　する（を）	×	×	×	×	○	○	×	×	×	○
世話　する (2)	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○
旅　する	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×
使い分け　する	−	×	×	×	○	−	−	−	−	−
電話　する	○	×	×	○	○	○	×	○	×	○
とりかえ　する	×	×	−	−	−	−	×	×	−	−
長生き　する (5)（を）	○	○	×	○	○	○	×	○	×	○
バイト　する	○	○*	×*	○*	○	○	×	○	○*	−
話し　する (9)（を）	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
引越し　する（を）	○	○	−	−	−	○	×	○	×	−
便利　する	×	×	×	○	○	×	×	×	○古	×
まね　する	○	○	×	○	○	○	×	○	×	×
味方　する	○	○	○	○	○	○	×	○	×	×
ミックス　する	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
楽　する	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
笑い顔　する	×	×	×	×	×	×	−	×	−	−

この表からは、サ変動詞の認定について、辞書間に非常にゆれが多いことがわかる。『岩波国語辞典四版』は他の9辞書が認めている「世話する」の語形も認めていない。また『新潮現代国語辞典』では他の9辞書が認めていない「旅する」を、『三省堂国語辞典』では「外交する」をそれぞれ認めている。「電話する」は日常語として頻繁に使われているが、4辞書がこの形を認めていない。

今回採集したサ変形の語で、どの辞書もサ変形を認めていないのが、「かっこ（う）する」「組み合わせする」「話しする」「楽する」「笑い顔する」の5語形である。

このうち「かっこ（う）する」は、

(4) こういうかっこして行きます（Y）

(5) ああいうかっこうしてんじゃない？（N）

のような使われ方で、日常語としては「かっこ（う）をする」より多く使われている。辞書の方が現実と離れていて、認定を怠っている例であろう。

「話しする」は

(6) うちあまり話ししないもんね（C）

のような使われ方で、Cが7回、Kが2回使用している。「話」は「話す」からできた名詞で、動詞形で用いようとすれば「話す」にもどせばいい、という考えで辞書が「話しする」を認めていないのであろう。しかし、「話す」と「話しする」は同じではない。「話す」は

(7) 勝手に話すからわかんないですよね（C）

のように動作そのものであるが、(6)の「話しする」は「話す」動作だけでなく、何かまとまった「話」をするのである。だから、家族とあまり話をしない息子のことを

(8) 話ししない人ですからねえ（K）

とは言うが、「話さない人ですからねえ」とは言わないのである。「話さない」の前に「自分のことを」など、目的語がくれば言えるが、

どの辞書にも「話しする」の語形は認められていないが、話者たちは他のサ変化したものと同じ意識で1語化して用いているのである。

「楽する」も話しことばとして違和感はないが、『日本国語大辞典』小学館（1979）の「楽」の項目の小見出しに「らくする悪かろう苦をするよかろう」が採用されている以外、どの辞書も「楽する」は認めていない。

「組み合わせする」「笑い顔する」は臨時的に1語化したものとみるべきであろう。

逆に、辞書がサ変形を認める語で、話者たちが「を・する」形を用いていたのが、「商いをする」(1)、「仕事をする」(1)、「省略をする」(1)、「長生きをする」(5)、「引越しをする」(1)、「返事をする」(2)の6語形11例であった。

サ変形を使用するか、「を・する」形を使用するかを話者別にみると次のようになる。

	S 家			N 家				
	K	C	M	Y	H	N	U	A
サ 変 形	11	17	6	21	14	3	10	2
を・する形	0	3	2	8	3	1	1	0

同じ名詞についての「サ変形」か「を・する」形かの使用例ではないが、どの話者もサ変形の方を多く用いていることがわかる。特にKには「を・する」形は1例もない。Yに「を・する」形が多いのは、Yが「長生きをする」を5回用い、どの例でも「を」を使っていたからである。

他に、1語化とは言えないが、サ変形では使われていたものに次のようなものがある。

(9) そんな思いしたことあります（Y）

(10) 日本的な感じするけどどうでしょ（C）

(11) ひいおばあちゃんて言い方してるね（N）

(12) いろんなことして騒いだのを覚えてます（K）

(13) …がしゃべるようなしゃべり方してたから（H）

これらの名詞は修飾語句と一緒に使われて名詞句を作り、その句がサ変動詞化した形をとっているもので、1語のサ変動詞と同一視するには無理があろう。

以上、話しことばで、ごく普通に使われる「世話する」「電話する」をサ変形は認めない辞書もあるなど、現実のことばと辞書の隔りが大きいこと、しかし他方で、サ変形が認められているのに繰り返し「を・する」形を用いる話者もいることなど、サ変化については一定の方向でとらえることが困難なことがわかる。

1－2　その他の「を」の使用・不使用

「を」の母音「O」が発せられる直前の母音が同音の「O」であれば、助詞の「を」もそれの長音化の中にのみこまれ、「を」がきわだって聞き取れないということも起こりうる。また、あえて発音しないですませてしまう、ということもありうる。そこで、「を」の使用の際と不使用の際の、直前の語の語末の母音を調べてみた。（表Ⅱ）

表Ⅱ　「を」の使用、不使用と直前の母音

	「を」使用の場合			「を」不使用の場合		
	S家	N家	計	S家	N家	計
直前の母音 a	11	30	41	13	32	45
i	6	47	53	7	20	27
u	2	6	8	3	7	10
e	10	28	38	8	10	18
o	15	31	46	18	31	49
直前の撥音	4	15	19	7	4	11
計	48	157	205	56	104	160

「を」の不使用は直前の母音が「O」のときが最も多いという結果は、同音の重なりを防ぐため「を」を発音しなかった、あるいは、長音化した前の母音に「を」がのみこまれるという予測を裏づけている。

しかし、最も多いといっても「a」との差は5例であるし、N家では1例であるが「a」の方が多い。この程度の差では、前の母音が「O」のとき「を」は不使用になることが多い、とは言い切れないであろう。

次に、「を」の使用、不使用にどのような個人差があるかをみてみる。

「を」を伴って用いられる動詞で、「を」が使用されている例と、「使用されていない例を話者別に拾いだし、それぞれ使用、不使用の比を出してみた（表Ⅲ）。

表Ⅲ　「を」の使用と不使用

	S			N				
	K	C	M	Y	H	N	U	A
「を」使用	10	23	19	82	45	8	20	14
%	22.2	46.9	79.2	60.7	55.6	47.1	62.5	66.7
「を」不使用	35	26	5	53	36	9	12	7
%	77.8	53.1	20.8	39.3	44.4	52.9	37.5	33.3

S家の祖母Kと母C、N家の父Nの3人が「を」の不使用例が使用例を上回っている。特にKの不使用が目立つ。Kの話しことばは今回の調査対象者の中で最も丁寧で「わたくし」「そんなことはございません」のような話し方をする唯一の話者である。その最も丁寧な話し方をするKに「を」の不使用が最も多いのはどう考えるべきか。

助詞の不使用をformality との関係でみると矛盾した結果になるが、藤原（1991）のようにfamiliality の観点からみれば矛盾したことにならない。つまり、Kはその4人の話し合いの中の最年長で、個々の語の選択では丁寧度の高い話しを選んでいるが、話し方としては親しくくだけた姿勢で話していると考えられるのである。

このことはまた、S家の娘MとN家の娘Aのそれぞれ最も若い話者が「を」は多く使用していることの説明にもなる。若年世代のことばづかいの乱れが云々されるが、このように、話し合いの場で最も若い位置におかれると、いちばんくずれない話し方になる、ということがわかる。もっとも、M、Aが同年世代と話している話しことばとの比較はできないので、M、Aがこの場に支配されて「を」を多く使用しているのか、平常「を」を多く使用しているのかはわからない。

次に特定の語で「を」の使用、不使用に差があるかないかをみてみる。今

回の2家族の話し合いの中で多く用いられた動詞（「する」を除く）で、その前の「を」の使用状況を見る。多く使われた語の順に、それぞれ使用、不使用の数を示す。

		例数
〔使う〕31例	「同じことばを使って」「それを使えば」など	9
	「きれいなことばφ使って」「標準語φ使って」など	22
〔とる〕22例	「年をとって」「読売をとって」など	8
	「年φとったら」「新聞φとって」など	14
〔つける〕10例	「気をつけて」「色をつけると」など	10
〔やる〕10例	「（帯に）手をやったのかも」「見回りをやる」	2
	「検査φやって」「ご飯φやって」など	8
〔呼ぶ〕8例	「名前を呼ぶときは」	4
	「名前φ呼んで」「友達φ呼んで」など	4
〔着る〕8例	「着物を着た人」	3
	「着物φ着たとき」	5
〔食べる〕7例	「ごはんを食べなさい」	1
	「これφ食べなさい」「お夕飯φ食べて」など	6
〔出る〕7例	「高校を出て」	1
	「青山φ出て」「外語φ出て」など	6
〔見る〕6例	「クラブだけを見ても」「字を見る」	2
	「顔色φみて」「面倒φ見て」など	4
〔聞く〕6例	「電話をきいて」「それをきいて」など	3
	「声φきかなくても」「電話φきいて」など	3
〔かける〕5例	「かぎφかけちゃう」「電話φかけて」	5

同じ動詞の前の「を」の使用状況は、どの動詞についても不使用の方が多いことがわかる。つまり、これらの動詞の前では「を」が使われないことが多い、ということである。

1－3 「を」の使用、不使用の環境

1－2で見た、多く使われていた動詞の前の「を」の使用、不使用を文中の環境の中でみてみる。

たとえば、「電話を（φ）きく」は

(14) …と思って　よくね　電話をきくと　注意して（C）

(15) 電話φきいてて　なんか　男だか女だかわからないような　ことばづかいですよね（C）

のように同じ話者の同じ文脈の中での使用例がある。(13)は「よく」という副詞の存在が影響して「を」の使用につながり、(14)は「電話きいてて」と1文節のように一気に話す例の中での不使用と考えられる。

また、「着物を（φ）着る」についても

(16) やっぱり　着物を着てね、手をこう結んでね（Y）

(17) 着物φ着るとき足元がすごく緊張する（U）

(16)も、副詞「やっぱり」を受けて「着物を着る」と「を」を使用し、(16)は「着物着るとき」と「とき」の修飾句として1語化して「とき」に続いていると考えられる。

必ずしも副詞と「を」の使用が一致するわけではないが、その受け方としてとりたての意識が働けば「を」は使用されることになり、動詞句として1語化される場合は「を」が消えやすいことはいえると思う。

「かぎφかける」「面倒φみる」など、共起関係の強い語の場合も「を」の不使用の例が多い。

一方で慣用句の「気をつける」はすべて「を」が使用されている。ただし慣用句でも「足φ洗う」は2例あったが2例とも「を」は使用されていなかった。慣用句だからというより「気をつける」の「気」が単音節の名詞ということが原因で「を」の使用と結びついたのであろう。

また、共起関係の強い語でも

(18) 歌φ歌われたの（K）

(19) 知床の歌を初めからおしまいまで歌っちゃったの（K）

では、(18)では不使用だが、(19)は「歌」と「歌う」の間に語句が挿入されてい

て「を」が使われている。

以上の例からは、助詞の使用、不使用を文中の環境で見るにしてもさまざまな観点があることを示唆している。

2. 「に」と「へ」

⑳ 家庭に入って　今度　満州に行きました（K）

㉑ 甲府へ帰って　…とこへまた来て（Y）

のように方向移動の動詞の到達する場所を示す語の後に「へ」と「に」が使われている。

「へ」と「に」について、田中（1977）は「「に」は本来、存在の場や帰着点あるいは比較の基準などを、静的に定位するものであるのに対し、「へ」は基本的な性格として、動的な指向性や経過性をもつ」と述べ、また田中（1991）は『京へ筑紫に坂東さ』に象徴される地域性を説いている。

まずS、N両家族別にそれぞれの助詞と動詞の使われ方を示す（表Ⅳ）。（すべて基本形で表わす）

表Ⅳ　「へ」と「に」の使われ方

動　詞	S家		N家		動　詞	S家		N家	
	へ	に	へ	に		へ	に	へ	に
行く	0	5	11	4	もどる	0	0	1	2
くる	0	0	9	4	（学校へ）やる	0	0	1	0
（学校へ）あげる	0	0	4	0	まわる	0	0	2	0
はいる	0	3	4	2	疎開する	0	1	0	0
入れる	0	0	2	0	近よる	0	2	0	0
帰る	0	0	2	2	引越す	0	0	0	1
出る	0	2	1	2					
通う	0	1	0	0					

動詞のヴァリエーションでも、頻度数でもN家が圧倒的に多く、比較は難しいが、N家ではどの動詞についても「へ」が多く使われ、S家では「に」が多く使われていることがわかる。S家の「へ」は1例のみである。N家の中では、Yが「へ」27回と「に」1回、Hが「へ」13回「に」5回と、YとHが「へ」を多用しており、U、Aは「に」を使うことが多い。Aは「へ」

を全く用いず「に」のみ6回用いている。

(20)(21)でみるとおり、「に」と「へ」は意味的な違いによる使い分けとは考えられず、話者の出身の地域的な差によるものと考えられる。すなわち、S家は全員が東京の生まれ育ちで、N家のU、Aも横浜と千葉で生育しているのに対して、YとHは山梨県で生育したという違いである。

不使用については

(22) おばあちゃんとこφ行ってしますから（U）

(23) 大学φ入ってから（M）

などがあるが、このφには「に」と「へ」のどちらも想定できる。そこで、このようなものを、「行く」「来る」など方向移動の動詞の「へ」「に」の使用に対する共通の不使用の例としてまとめてみる。（表V）

表V　「へ」「に」の使用と不使用

	S家		N家	
「へ」使用	1	72.7%	42	79.2%
「に」使用	15		19	
不　使　用	6	27.3%	16	20.1%

不使用を話者別にみると、K1、C2、M3、Y1、H10、U3、A2となっている。

「へ」「に」に関しては、20〜30%が不使用ということがわかる。話者別ではN家でNが「に」「へ」に関してはすべて発音していて不使用の例がないこと、また、発話量が多く、使用数がN家全体の半数以上を占めているYに、不使用の例が少ない、つまりYは助詞「へ」「に」をきちんと使用していることがわかる。

3. 「が」の使用と不使用

(24) 「注意されたりすることがよくある…母にはけっこう注意されたことφありますよね（C）

のように同じ話者の同じ談話の中で「が」の使用と不使用があるが、まず、

この例の「ことがある／ことφある」のような形式名詞の後の「が」の使用状況をみる。

「こと（が）ある」の形を調べ「こと（が）」の後の形との関連を知るには「こと（は）ある」も似た語形として調べる必要がある。「ことφある」のφに想定できるのは「が、は、も」だが、「も」の場合は特別の取り立てで、不使用は意味をなさないので除外し、「が」「は」だけをみていく。

表Ⅵ　形式名詞「こと」に続く「は、が、φ」

		家族別使用回数		話者別使用回数	
		S	N	S	N
使　用	ことがある	5 } 44.4%	7 } 47.1%	C(4)　M(1)	Y(4)U(1)H(2)
	ことはある	3	1	C(2)　K(1)	U(1)
不使用	ことφある	10　55.6%	9　52.9%	C(8)　K(2)	H(5)Y(3)U(1)
使　用	ことがない	1 } 26.7%	3 } 62.5%	K(1)	H(2)　A(1)
	ことはない	3	2	C(2)　M(1)	A(2)
不使用	ことφない	11　73.3%	3　37.5%	K(6)C(4)M(1)	H(2)　A(1)
	(ございません)				

助詞を使用した「ことが／はある」と、助詞を使用しない「ことφある」では、不使用の方が半数以上を占めることで、S・N家に共通している。否定形ではS家の「ことφない」がN家の約2倍になっている。

話者別ではKの「ことφある」「ことφない」と不使用の例が多い。なお、Kは「ことφございません」の形でも3回使っている。Cは「ことφある」が8回で不使用の例が最も多いが、「ことがある」も4回用いていて、いつも助詞を使用しないということではない。K、Cに採集例が多くて、不使用の例も多いが、この2人が特に不使用の傾向が強いとは言い切れない。他の話者に「ことが／はある、ことが／はない」の語形の使用が少ないので、KとCの不使用の例が目立っているにすぎないという可能性もあるからである。

その他の形式名詞の後の「が」については、

(25)　こういう雰囲気ってのがありますよね（C）

(26) わりとそんなところがあったんですね（C）

などがあるが、これらの「が」「は」の使用状況は次のようである。

表Ⅶ

		S	N
の	～のが	14	16
	～のは	21	21
	～のφ	1	2
とき	～ときが	0	0
	～ときは	8	18
	～ときφ	4	1
ところ	～ところが	4	0
	～ところは	0	0
	～ところφ	0	0

ここでわかるのは、形式名詞「とき」以外は、形式名詞の後の助詞はたいてい使われるということである。

4. 「と」「で」「より」「から」

これらの格助詞の使用、不使用状況を示す。

表Ⅷ

		S	N
で	で	94	105
	φ	0	0
と	と	81	124
	φ	2	6
から	から	18	30
	φ	0	1
より	より	13	8
	φ	0	0

以下に不使用の例をあげる。

「と」

(27) お茶碗φお箸置くとすぐに（K）

(28) ああそりゃそうかなあφ思ってね（Y）

(29) お母ちゃんお母ちゃんφ言ってたんですよね（H）

「から」

(30) あの中学から6人、6年生でね、6人しかいなかったですよ。中学φ私立へ入ったのは（H）

これらの助詞はたいていが使用されるのであるが、不使用になるのは「と」ではセットになるものを並列するとき、引用のとき、「から」ではたまたま同じ文を繰り返している場合である。直前に同じ助詞が来れば、2度目は不使用になることは他の助詞にもあり、「から」に特有のことではない。観点を変えれば、このような繰り返し以外では「から」が不使用になることはない、とも言えるのである。「で」はほぼ200例採集したが、不使用の例は皆無であった。それだけ「で」は文脈など前後の環境に左右されにくく、不使用では文意が伝わらなくなる助詞だということがわかる。

－まとめ－

助詞の使用、不使用について、実際の使用例から、その不使用の意味を考えてきた。サ変動詞の1語化や「に」と「へ」など、不使用というよりその語形自体についてや助詞の使い分けの状況についてもみてきた。いずれも日本語教育の現場で、基本文型の提示や語形の説明に現実的な対応を迫られていることからで、その現状を把握しておきたいと考えたからである。

その結果、「名詞＋する」「名詞＋を＋する」や「名詞＋を＋動詞」「名詞φ動詞」の語形では助詞の不使用が使用を上回っていること、「に」と「へ」は話者の差が大きいこと、「と」「で」「より」「から」で不使用になることが少ないことなどがわかった。しかし、使用、不使用を決定する環境についてはまだ明らかにできてはいない部分を残している。さらに実例に即した理論的な考察を深める必要があると考えている。

中島　文雄『日本語の構造』（岩波書店1987）
藤原　雅憲「話し言葉における助詞省略の効果」（『平成３年度日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会）
楠本　徹也「ゼロ格の確立」（『日本語教育学会創立30周年記念大会予稿集』同上）
田中　章夫「助詞　(3)」『岩波講座日本語　日本語文法Ⅱ』（岩波書店1977）
田中　章夫『標準語＜ことばの小径＞』誠文堂新光社1991

注１　使用した国語辞典の出版社と発行年は次のとおり

①	三省堂	1988	②	講談社	1989	③	岩波書店	1986
④	小学館	1993	⑤	三省堂	1992	⑥	三省堂	1992
⑦	集英社	1993	⑧	新潮社	1985	⑨	三省堂	1989
⑩	三省堂	1990						